

# 新発田城跡の発掘調査



平成30年3月

新発田市教育委員会

## 新発田城のあらまし

【新発田城の発掘調査】 新発田城は、新発田市街地のほぼ中央に位置します。新発田藩の初代藩主・溝口秀勝の入封にともない慶長7年(1602)年に築城が開始され、承応3年(1654)年、三代藩主・宣直のときに完成したと考えられます。明治4年(1871)年に新発田藩が廃止となるまで、藩の政治的・軍事的な中心地でした。

新発田市教育委員会では、陸上自衛隊新発田駐屯地の整備や新発田城址公園の整備、平成16年の三階櫓・辰巳櫓の復元などに関連して、新発田城跡で20か所以上の発掘調査を行ってきました。その結果、いにしえの姿が徐々に明らかとなってきています。

【新発田城の立地】 新発田城のある市街中心部は、加治川が作った扇状地にあります。付近を詳しく見ると、南西に新発田川、北東には中田川などの小河川が流れ、扇状地の中でも小高い場所だとわかります。この高まりは、城と同じく南東から北西へ延びています。これらから、新発田城は地形を活かした城と言えるでしょう。

また、扇状地の外側には新潟砂丘が何列も連なり、河川は海に直接注がずに砂丘沿いを西流していました。このため、砂丘の内側には広大な潟や湿地帯が作られました。新発田城は、人の行き来が容易ではない河川や潟・湿地帯を、天然の防御施設として取り込み築城されたと伝えられています。



『一步一間歩詰絵図』(天保11年頃、新発田市立図書館蔵)



*門*	
A 表 門	a 三階櫓
B 裏 門	b 鐵炮櫓
C 中ノ門	c 辰巳櫓
D 西ノ門	d 折掛櫓
E 稲荷門	e 乾櫓(二ノ丸隅櫓)
F 土橋門	f 丑寅櫓
G 岩原門	g 西ノ門脇櫓
H 桜門	h 東 櫓
I 大手門	i 中ノ門脇櫓
	j 西 櫓
	k 大手鐵炮櫓

新発田城の主な門と櫓（江戸時代後期）



新発田城の位置（縮尺 1/75,000）

（国土地理院発行5万分の1地形図「新発田」を改変）

## 新発田城の築城以前のようす

【平安時代の集落】これまでの発掘調査の結果、新発田城の敷地からは、新発田城が築かれるより前の暮らしの痕跡も見つかっています。

この場所で最も古い時代の出土品は、今から1600年ほど前の古墳時代の土器です。単独で出土したため、当時の詳しい様子はわかりませんが、この頃には人々の土地利用が始まっていたことを裏付ける貴重な発見です。

さらには、平安時代前期（1200年ほど前）の集落も新発田城の地下から見つかっています。掘立柱建物や溝、井戸などから、土師器・須恵器と呼ばれる土器や当地では珍しい灰釉陶器などが出土しました。中には、記号や文字が記された「墨書き土器」も認められます。

新発田城の立地する微高地は、近隣の中では安定した地形で、しかも比較的広い面積を持っていたようです。平安時代の人びとにとって、このような土地は集落を営むのに好都合な場所だったのではないでしょうか。



遺跡の重なり（イメージ）



平安時代の土師器出土状態（ニノ丸南半部の屋敷地跡）

## ＜阿賀北の名族・佐々木一族＞

現在の新発田市付近は、有力氏族の佐々木氏が地頭にあてがわれました。土着化した子孫は加地氏・新発田氏・竹侯氏などに分かれ、さらに五十公野氏・古川氏・楠川氏などが派生したと考えられています。

これらの氏族は、各々の土地を支配するとともに領地内に館を構えました。

佐々木氏の分家のひとつである竹侯氏は、新発田市東部の川東地区を本拠地にしたと考えられています。室町時代に竹侯氏が屋敷地とした宝積寺館跡は、発掘調査の結果、1辺が100メートル以上の長さを持つ堀に囲まれた、巨大な館であったことがわかりました。

また、新発田氏の分家にあたる五十公野氏が居を構えた五十公野館跡でも発掘調査が行われ、戦国時代の屋敷地が見つかっています。



いじみのやかた  
五十公野館跡の発掘調査（平成27年）



中世の荘園と主な領主層  
(『新発田市史 上巻』を改変)

**【新発田氏の登場】** 平安時代の後半以後、日本各地に「莊園」と呼ばれる私有地ができました。新発田城の周辺は加地莊と呼ばれ、鎌倉時代には、幕府の有力武士である佐々木氏が治めることになりました。佐々木氏は次第に土着し、加地氏・新発田氏・竹俣氏などに分かれました。室町時代のころにはそれぞれの勢力圏が固まってきて、加地氏が市域の北東部、竹俣氏が市域の東部、新発田氏が市域の西部を支配するようになりました。

越の中でも県北地域は独立性が強く、佐々木氏一族のほかにも岩船郡域の本庄氏・色部氏、胎内川流域の中条氏・黒川氏などの有力豪族が並立し、時に結び付き、時には対立しながらも、それぞれの土地を治めました。

戦国時代後期の新発田氏当主である長教は、上杉謙信の下で政権の中枢を担いました。長教の弟で、新発田氏を継いだ重家も、有力武将として上杉家の下で活躍しましたが、謙信の跡目争いに勝利した上杉景勝と後に対立し、7年におよぶ抗争の末、天正15（1586）年に新発田館は陥落し新発田氏は滅亡しました。

**【新発田氏の館跡】** 新発田氏の本拠地と伝えられるのが、現在の新発田城跡の北側部分です。この範囲は、江戸時代の古文書や絵図に「古丸」と記され、絵図には四角に廻らされた堀が描かれていることから、この場所が新発田氏の館跡だと考えられてきました。

この地点で発掘調査を行った結果、江戸時代よりも古い時代の堀が発見され、付近からは多くの柱穴や井戸なども見つかりました。これらの成果から、堀に囲まれた館の存在が浮かびあがってきます。

併せて、室町時代初めから戦国時代までの土器・陶磁器が多く出土しました。通常の集落ではあまり出土しない茶道具、青磁や白磁などの中国産磁器、儀礼に用いられた素焼きの皿などが、質・量ともに豊富に見られ、伝承どおり新発田氏の屋敷地だったと言えそうです。

土器・陶磁器の年代からみて、屋敷地は鎌倉時代初期から戦国時代の終わりごろまで続いたと考えられます。特に鎌倉時代終わりごろから室町時代の前半ごろが充実し、新発田氏の勢力拡大の様子がしのばれます。

この時代は、南北朝期の騒乱期で多くの合戦がありました。古文書に新発田氏の名前が登場するようになったころとも重なります。新発田氏の、地方豪族としての基盤が確立していった時期と言えるようです。



「古丸御屋舎」の位置（『一歩一間歩詰絵図』）



室町時代から戦国時代の柱穴（「古丸御屋舎」地点）



鎌倉時代頃の中国産磁器の破片（青磁の碗・皿）



室町時代頃の陶器の破片（天目茶碗など）

## 新発田城の築城と変遷

【新発田城の築城】 慶長3（1598）年、豊臣秀吉の命令で、上杉景勝が会津へ移り、越後には堀秀治が入ります。この時に、溝口秀勝が補佐役として、加賀・大聖寺から越後・蒲原郡へ6万石で入国しました。領域は、加治川を北限とし、南は見附市付近までの広大な範囲でした。秀勝は、新発田重家の館があった新発田を拠点に定め、領内整備を行いました。築城も進められ、まず二ノ丸の西ノ門が完成したと伝えられます。そして承応3（1654）年、三代藩主・宣直の時に完成しました。



江戸時代初期の新発田城本丸

（『御家中絵図』県文化財、正保2(1645)年頃、新発田市立図書館蔵）



石垣の復旧を幕府に申請した絵図（赤丸の箇所）

（『新発田城絵図』天和2(1682)年、新発田市立図書館蔵）



本丸の石垣と復元された三階櫓

## <「城郭」の種類>

「城」には様々な分け方があります。ここでは、地形による分類をご紹介します。

- ・山城：山の山頂や尾根筋に築かれた城です。眺望が利き、攻撃に対する防御性が高い一方、居住性の面では課題も多く、戦乱の収まつた江戸時代には減少しました。

主な例：頼文山城（市内金山）、加治城（市内東宮内）、春日山城（上越市）、安土城（滋賀県近江八幡市）

- ・平山城：本丸が小高い丘陵上に築かれ、城壁が麓に及ぶ城です。家臣団や城下町の規模が拡大したことや、集団戦が広まったことに対応した城と考えられています。

主な例：村上城（村上市）、大坂城（大阪市）、姫路城（兵庫県姫路市）、仙台城（宮城県仙台市）

- ・平城：平野部に構えられ、城下町との高低差の小ささが特徴です。戦国時代後期になると、城が軍事面だけでなく政治経済の拠点となり、利便性を重視した城が増えました。

主な例：新発田城、高田城（上越市）、長岡城（長岡市）、村松城（五泉市）、名古屋城（名古屋市）

## 本丸の発掘調査

【本丸の構造と発掘調査】 本丸は、城の中心に位置する区画です。新発田城の本丸は、不整五角形の形をしており、堀の内側には藩主の御殿が、周囲には門2棟と櫓4棟が建てられました。石垣は、本丸外周の四分の三程度のみに築かれ、二ノ丸や三ノ丸では、門構えの一部以外には築かれていません。

本丸では、9か所で発掘調査を行っています。このうち、御殿付近は調査面積が狭く、江戸時代の遺構はまだ見つかっていません。ほかには、櫓復元に先立ち辰巳櫓跡と三階櫓跡の発掘調査、表門から旧二の丸隅櫓の間の石垣・土塁の調査をしています。また、自衛隊駐屯地の施設建設に伴い裏門付近でも発掘調査を行いました。

【三階櫓跡の発掘調査】 新発田城に天守閣はありませんが、これに相当する三階櫓が本丸の北西隅に建てられました。櫓は明治初年に解体され、土台・石垣も大きく崩されたため、発掘調査は狭い範囲にとどまりました。調査の結果、三階櫓は土塁の上にも石垣の土台を築いていたとわかりました。また、出土した瓦は赤瓦が多く、解体直前は赤瓦ぶきだったと考えられます。

【辰巳櫓の発掘調査】 本丸の南東隅に建てられた二階建ての櫓が辰巳櫓です。櫓は明治初年に解体されました。土台は良好に残されており、発掘調査によって礎石や入口の踏み石などが発見され、櫓復元の重要な資料が得られました。また、屋根瓦に混じって、溝口家の家紋である「五階菱」の形をした焼物も出土しました。櫓に付けられていたものと考えられます。

【裏門付近の発掘調査】 本丸の北側にあったのが裏門です。絵図や古写真から、堀に張り出す「枡形」という施設があったとわかっています。発掘調査の結果、この枡形部分の石垣が見つかりました。石材は、新発田城で多くみられる「古寺石」（粗粒玄武岩）以外の岩石も見られ、表門側とは異なる様子もうかがえます。

【本丸石垣の発掘調査】 本丸の石垣は、石を整形して隙間なく積む「切込接ぎ」によるものですが、新発田城の場合、個々の石の大きさや形をそろえ目を通した布積みが特徴的で、「切込接ぎ」の代表例と言えます。

石垣の最下部には、全体を下支えする「胴木」と呼ばれる材木が発見されました。また、その上の石には「山笠」と呼ばれる記号が墨で記されていました。



櫓の礎石と入口に配置された石（辰巳櫓）



家紋（五階菱）をかたちどった焼物（辰巳櫓）



地下に埋まっていた石垣（本丸裏門の枡形）



石垣の基礎部分・胴木（表門～旧二の丸隅櫓の間）

新発田城の石垣は、古文書や絵図から、江戸時代の間に地震や大雨によってたびたび被害を受け、5回以上の修復があったとわかっています。

このような石垣修復の様子をうかがわせる石積みが、表門と旧二の丸隅櫓の間にある石垣で見つかりました。この場所では、積み直す前の石垣が、前方へ張り出すとともに下方へ傾いた状態で残されていました。石垣の崩れた際に変形した様子を知ることができます。そして、この上に現在の石垣が築かれており、修復されたと理解できます。ただし、この修復部分には土管がはめ込まれており、明治時代以後の積み直しの可能性もあります。

また、三階櫓と辰巳櫓の石垣のうち、本来は土壁の土に埋もれて人目に触れない部分には、「古寺石」よりも脆い石材が、不整形のまま積まれていることもわかりました。このような「古寺石」以外の石材利用は、裏門付近の発掘調査でも見つかっています。石材の違いは、石垣を積んだ時期の差を示している可能性があり、修復以前の石垣の様子を探るうえで、重要なカギとなってくれかもしれません。



石垣の積み直し状況（表門～旧二の丸隅櫓の間）



「古寺石」以外の石材（右側）を用いた石垣（辰巳櫓）

## ＜さまざまな石垣＞

「城」と言えば石垣をイメージする人は多いのではないでしょうか。

城に大規模な石垣を用いるようになるのは、戦国時代後半以後で、織田信長の安土城などが有名です。石垣は次第に各地へ広がり、江戸時代には、多かれ少なかれほとんどの城で見られるようになります。

石垣は、石材の加工方法の違いから大きく次の3通りに分けられます。

のづらつ  
（1）野面積み：石材を未加工に近いまま積む。石材同士の隙間は広く、間を小さな石で埋める。

うちこね  
（2）打込接ぎ：割って整形した石材を積む。石の隙間に割石を入れ、比較的の目が詰まった石垣。

きりこね  
（3）切込接ぎ：方形に面取りした石材を積む。石材同士の隙間はなく、目地の通った石垣が多い。

石垣の構築は、（1）→（2）→（3）の順に開発され、新しいほど切込接ぎが多い傾向にあります。

また、上記とは別に、石材の積み方によって以下の分類方法もあります。

ぬのづ  
（ア）布積み：石材を四角くそろえて、横の目が通るように積む方法。

らんづ

（イ）乱積み：かたち・大きさの異なる石材を様々な方向に積む方法。

この2つの分類方法を合わせて、「打込接ぎ 亂積み」のように呼ぶ場合もあります。ちなみに、新発田城本丸の石垣は「切込接ぎ 布積み」となります。



のづらつ  
野面積み  
(イメージ)



うちこね  
打込接ぎ  
(新発田城 土橋)



きりこね  
切込接ぎ  
(新発田城 本丸)

<二ノ丸の発掘調査>



大量の瓦が捨てられた溝（第8地点）



区画塀の土留め遺構（第8地点）



「御蔵屋敷」地の石立柱建物（第10地点）



「古丸御屋舎」地の石立柱建物（第22地点）



西端部外堀の護岸施設（第19地点）



発掘した堀に滞水した様子（第21地点）

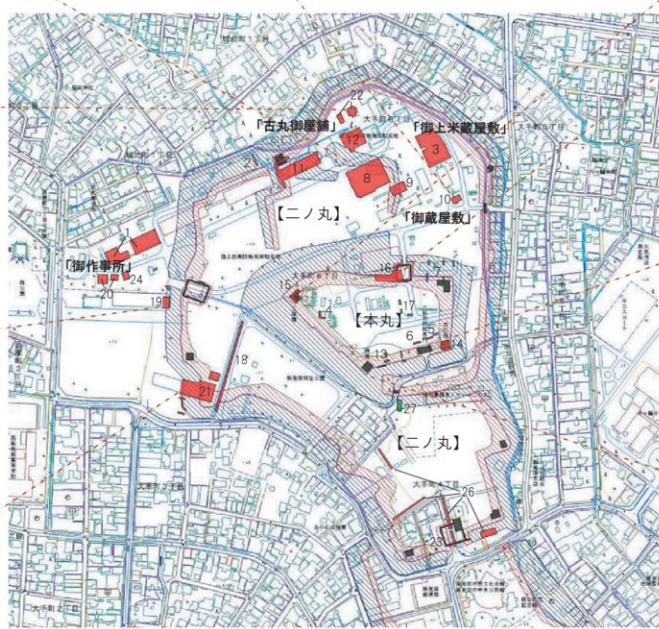
<本丸の発掘調査>



三階櫓の発掘調査（第15地点）



裏門の石垣（第16地点）



新発田城跡の主な発掘調査地点

■：発掘調査を実施した主要な箇所（数字は地点名を示す）

※ 堀および土塁・建物の位置は『歩一歩間詰絵図』（天保11(1840)年ごろ）を元に作成した。

## 二ノ丸の発掘調査

【二ノ丸の構造と発掘調査】 二ノ丸は、城の中心である本丸の外側に廻らされた外郭部です。新発田城は、二ノ丸が本丸をすっぽりと取り囲みますが、さらなる外郭である三ノ丸は、二ノ丸の南側のみに存在し、北側には外郭がない形態をとっています。

新発田城の二ノ丸は、本丸をはさんで北半部と南半部に大きく分けられます。江戸時代後期の絵図によると、北半分は主に藩の施設が、南半分には藩の重臣たちの屋敷地がありました。南端部には中ノ門、西端部には西ノ門が配され、周囲に6棟の櫓が築かれていました。

二ノ丸では、12か所で発掘調査を行っています。多くは自衛隊駐屯地施設整備に伴う北半部の調査ですが、南半部でも公園整備関連の調査を実施しています。

【二ノ丸北半部の調査】 二ノ丸の北半部は、江戸時代前期の絵図によると築城当初は重臣屋敷が多く、「蔵屋敷」「鍛冶小屋」「大工小屋」などが部分的に見られる程度ですが、後期になると重臣屋敷はなくなり、「二ノ丸御屋敷」「古丸御屋舎」「御蔵屋敷」「御上米蔵屋敷」など藩の施設が大半を占めるようになりました。

「古丸御屋舎」からは、池や植樹の痕跡が見つかり、絵図にも描かれた庭園の存在が明らかとなりました。また、「御蔵屋敷」地点や「御上米蔵屋敷」地点では、礎石を持つ建物や大きな柱穴の掘立柱建物が発見され、蔵などが存在したことを物語っています。さらに、年貢米に付けられたと思われる木の荷札も出土しており、記録どおりに米蔵が存在していたと言えるでしょう。

一方で、絵図には描かれていない場所から、堀と思われる大規模の遺構が複数見つかっています。古文書や絵図に残されていない改修や造成が行われていた可能性もあり、興味深い発見です。

【二ノ丸西端部の調査】 二ノ丸の西端部には、西ノ門が築かれています。その付近からは、堀に面した道際に、柱や杭などを組み合わせた護岸の痕跡が発見されました。この護岸施設を検討した結果、少なくとも3回の改修があったと判明しました。ただし、この改修はいずれも江戸時代後期以後のもので、築城当時の様子はわかつていません。堀の埋め土からは大量の土器・陶磁器や木製品・金属製品が出土しました。明治時代になり、堀を埋める際にまとめて廃棄したものと思われます。



堀斜面の土留めと廃棄された瓦（「古丸御屋舎」地）



掘立柱建物の柱穴と根石（「古丸御屋舎」地）



井戸底の水溜めに使われた桶（「古丸御屋舎」地）



木製品の出土状態（二ノ丸南半部の屋敷地）

【二ノ丸南半部の調査】 二ノ丸の南半部は、江戸時代を通じて大半が重臣の屋敷地でした。市ではこれまでに3つの地点で発掘調査を行っています。

自衛隊新発田駐屯地史料館の地点では、重臣の屋敷地とその外側に広がる堀を発掘調査しています。

調査の結果、堀は上幅で22m、深さ2m程度が残されていました。堀底は平坦で、両岸の底近くには、杭と柱を使った土留めの痕跡が見つかっています。

屋敷地部分では、大小の穴から多くの陶磁器や木製品が出土しましたが、建物の跡は見つかっていません。この調査範囲が屋敷地の裏手にあたることから、建物が建てられなかった場所だったかもしれません。江戸時代後期の絵図では藩の重臣である堀家の屋敷となっていますが、発掘調査でも「堀」と記された陶器や木札が見つかっており、絵図を裏付ける発見と言えます。

また、アイネスしばた（城址公園）の調査では、中ノ門の一部をなす小門の礎石と門内側の整地層、さらに二ノ丸南端部の堀が見つかっています。整地層は、門の内側の枠形と呼ばれる区画にあたり、砂を主体として何層もつき固めた強固なものです。堀は、二ノ丸西側など他の地点よりも深く掘られており、城の正面を意識した構えであったと考えられます。



門内の整地層と明治時代の杭列（二ノ丸中ノ門）



小門の礎石（二ノ丸中ノ門）

### ＜新発田城の堀と土塁＞

堀や門、石垣などとともに、城郭をかたち作る重要な要素が、堀と土塁です。

新発田城の堀は、現在は本丸の南半部にしか残っていませんが、江戸時代には本丸・二ノ丸・三ノ丸をめぐる多くの堀がありました。このうち、本丸と二の丸の一部では埋没した堀が発掘調査により発見され、当時の様子を知る手がかりが得られています。

発掘調査の結果、場所によって多少のばらつきはあるものの、堀底の深さは概ね標高6m前後だと分かりました。一方、当時の地面の高さは、現在の本丸内側の標高（9～9.5m）と同程度と考えると、当時の地面から3～3.5mほどの深さだったと推測できます。

また、堀底の付近からは、堀の斜面が崩れるのを防ぐ土留めの遺構が見つかりました。丸太材や角材を堀の斜面と平行に置き、杭を打ち込んで抑えとしています。また、二ノ丸の西ノ門の付近では、当時の道に面した堀岸に、横木と杭による護岸の跡が見つかっています。

堀を掘削することで発生した土は、堀の内側に土塁として盛られたと考えられます。しかし、そのほとんどは、明治時代以後に崩されて堀を埋めるのに使われたまま残っています。ただ、発掘調査によって、土塁の一一番下の部分が発見されており、土塁の幅を知る手がかりが得られています。また、土塁の下からは、土塁が築かれる前の遺構も見つかっており、これを調べることで、土塁の築かれた年代が推測できます。

このほか、二ノ丸の北半部などでは、江戸時代後期の絵図には見られない堀の跡が見つかっています。古文書や絵図には、堀の位置を変えるような大工事の記録は確認できず、今後の重要な課題のひとつです。

おさくじどころ

## 御作事所の発掘調査

おさくじどころ

御作事所は、二ノ丸の西側外に設けられた施設で、藩の建築関係の業務を管理・監督した部門だと考えられます。同所は、江戸時代初期の絵図では家臣の屋敷地でしたが、後期までには御作事所が設置されました。

敷地内では、これまでに3か所で部分的な発掘調査を行っています。

調査の結果、3棟の掘立柱建物が見つかっています。このうちの1棟は、柱穴の底に平たい石を置くことで柱が沈むのを防いだ工夫が見られます。この建物は、御作事所の区画と同じ方向を向いており、御作事所の一部を成していたと考えられます。

また、御作事場の東側では礎石を持つ建物が見つかりました。南北に長く幅の狭い建物で、長屋のような形をしています。やはり敷地の区画に沿うように建てられていたことから、同所の施設の一部と考えられます。



「御作事所」付近  
礎石を持つ建物跡



「御作事所」の掘立柱建物跡



本丸と二の丸を結ぶ土橋の石垣



土橋の打込接ぎ石垣と石に残された矢穴

## 土橋の発掘調査

平成15年の城址公園の整備関連工事の最中に、石垣が発見されました。絵図と照合した結果、土橋門南側の堀を渡る「土橋」の石垣だとわかりました。さらに、平成24年の旧県立病院解体工事では、この石垣の東側面も見つかり、翌年に範囲確認調査を実施しました。

発掘調査の結果、石垣の北側部分は明治時代以後に積み直されたこと、南側部分は江戸時代の様子を保っていることがわかりました。この南側部分の注目すべき点として、本丸石垣との積み方の違いがあげられます。

本丸の石垣は、四角く整えられた石を隙間なく積み上げる「切込接ぎ」で作られているのに対し、土橋の石垣は、石と石の隙間に細長い石を詰める「打込接ぎ」という積み方がとられていました。

一般に「打込接ぎ」は「切込接ぎ」よりも古手の技術と考えられており、土橋の石垣は、現在残る本丸石垣よりも前に築かれた可能性があります。

本丸の石垣は、古文書や絵図の記録から、江戸時代に何度も修復を行ったことが分かっており、現在の残されている石垣も、江戸時代中期以後に積み直された可能性が高いと考えられます。

土橋の石垣は、本丸石垣が最初に築かれたときの様子を知る、重要な手がかりを与えてくれています。

## 新発田城の出土品

新発田城からは江戸時代の土器・陶磁器・漆器・木製品・石製品・金属製品・瓦などが多く出土しています。土器・陶磁器は、茶道具などの高級品から日用雑器に至るまで多種多様です。木製品では、漆器の椀や皿、箱のほか、年貢の米俵に付けたと思われる荷札も見つかっており、当時の様子を具体的に知ることができます。

【食器】 遺跡の出土品で多くを占めるのが食器です。食器の種類には、椀・皿・鉢などがあり、現代の和食器と比べても大きな違いはありません。陶磁器のうつわのほか、漆器も見つかっています。

陶磁器の多くは、佐賀県の有田地方で作られたものが多く、中には「鍋島焼」という、佐賀藩で特別に生産され市場には出回らない高級磁器の皿も出土しています。幕末になると瀬戸（愛知県）・美濃（岐阜県）地域の磁器も増加します。このほかに会津や京都で焼かれた陶器も見られます。また、産地不明の陶器の中には、近隣の真木山丘陵周辺で焼かれた製品も含まれていると考えられます。



食器類（有田地方（佐賀県）産の陶磁器）



高級磁器である鍋島焼（佐賀県）の皿

## ＜新発田城の瓦＞

瓦ふきの建物が広まるのは、一般的に江戸時代以後と言われ、それまでは寺院などの限られた施設でのみ用いられていました。市内でも、戦国時代以前の遺跡から瓦は見つかっていません。

新発田城は、明治初年の写真を見ると、櫓や門は瓦ふきでした。ただし、絵図の表現から、築城初期はこけら瓦だった可能性があり、旧二の丸隅櫓の解体工事でも同様の指摘がなされています。新発田城は寛文8（1668）年の大火で全焼しており、再建の際に耐火性のある瓦ふきに替わったものと考えられます。

また、藩主の御殿や臣家の屋敷はこけら瓦、かやふき屋根だったことが絵図や明治初年の写真からわかります。横雪帯であることから、凍結で割れやすく、重量もある瓦屋根を避けたためかもしれません。

新発田城から出土した瓦は、黒瓦（素焼きのいしむ瓦）と、赤瓦（鉄錆のかかった瓦）に大きく分けられます。发掘調査の結果、黒瓦が多く出土しているため、門や櫓の多くは黒瓦ふきであったと考えられます。その一方で、赤瓦も各所から発見されており、赤瓦を使用していた時期があったこともわかりました。

瓦の中には「大坂瓦印 中山市郎右衛門」と刻印されたものがあり、大坂などの遠方で作られた瓦も購入して用いていたようです。



鬼瓦（赤瓦）



のきひら  
軒平瓦（上：赤瓦、下：黒瓦）



のきひら  
軒丸瓦（黒瓦）



瓦の刻印

うつわの裏底には字の書かれたものも見つかっています。重臣屋敷出土の陶器には「二ノ丸 堀」などと書かれたものがあり、人名や使った場所を記入したと考えられます。また、家紋を描いた漆器なども出土しています。

このほかに箸も見つかっていますが、出土したものは白木ばかりで漆塗りの箸は出土していません。また、徳利や杯など飲酒に関わるものや、急須・湯飲み茶碗などお茶を飲む道具なども見つかっています。

**【茶道具】** 食器のうち、やや特殊なものに茶道に関する道具があります。新発田城からは抹茶茶碗や茶葉を挽く茶臼が出土しています。抹茶茶碗には、江戸時代初めころに焼かれた天目茶碗や、江戸時代後期に焼かれた相馬駒焼（福島県）の茶碗などがあります。相馬駒焼の茶碗は、かたちが若干ゆがむ「沓茶碗」で、新発田から出土することは大変珍しいです。

**【調理具】** 調理道具も、出土品の多くを占める種類です。煮炊き用の様々な土鍋、ものを煎るほうろく、お茶を煮出す土瓶、小形こんろ、すり鉢や包丁なども見つかっています。鍋には持ち手の付く双耳鍋や片手持ちの行平鍋があります。また、鉄製の鍋も出土しています。

**【はき物・装身具】** 土の中では残りづらいためか、衣類は出土していませんが、はき物である下駄は多く見つかっています。下駄には、一本作りのものと、歯を別作りにして差し込むものがあります。また、漆を塗ったものも見られます。材質はキリやスギのほかにモクレンが多く見られ、歯にはケヤキなどが用いられています。また、シロ口で作られた鼻緒も見つかっています。

身を飾る道具では、かんざし・くしが出土しました。また、化粧品である紅を入れていた容器も見つかっています。外側には「京 小町紅」などと記されており、京都産のものが使われていたとわかります。

**【加工具・建具】** 加工具としては小刀・鎌・金づちなどが出土しています。ほかに和釘、かすがい、釘隠しや引手などの飾り金具も出土しています。金属製品の多くは、西ノ門付近の堀からまとまって出土しており、ほかにも金や真ちゅうなどの薄い板片もあることから、付近に金属加工を扱う施設が存在したかもしれません。

**【屋根瓦】** 新発田城跡からは大量の屋根瓦が出土しています。黒瓦と赤瓦の2種類が見られますが、建物や時期による違いの有無は明らかになっていません。



相馬駒焼の徳利（奥左）と沓茶碗（奥右）ほか



調理具（鍋、すり鉢、ほうろく、土瓶）



下駄（左：漆塗り、右：鼻緒付き、奥：差歎）



かんざし、飾り金具、きせる、火箸、包丁など

【その他の道具】 明かり取りの道具として、灯明皿やひょうそく（たんころ）、油壺が出土しています。灯明皿は、縁がスズで黒く固まっているものも少なくありません。他には硯・水滴などの文房具、天神や大黒・ハトなどの土人形、植木鉢なども見つかっています。

また、文字の記された板が多く見つかっています。大きく分けて、①荷札や漁業の鑑札（許可証）、②所有者を示す名札、③樽や桶などの容器のふた、④文字の練習や落書き、などがあります。樽や桶のふたには、「越後新発田 鈴木」や「越后 芝田 住吉屋/志ら雪」、「塩鰐子」、「御水飴 越後沼垂 あめや九郎三郎」などと商品名や販売者、内容物が記されており、当時の暮らしづくりが具体的に浮かび上がってきます。

このほか、タイの骨やカキ貝の殻、様々な植物の種も見つかっています。二ノ丸の蔵屋敷からは焼け焦げて炭になった米が多量に出土しました。糊が付いたままのものが多く、米俵の一部とみられるものも出土していることから、火災により焼け焦げたものと考えられます。



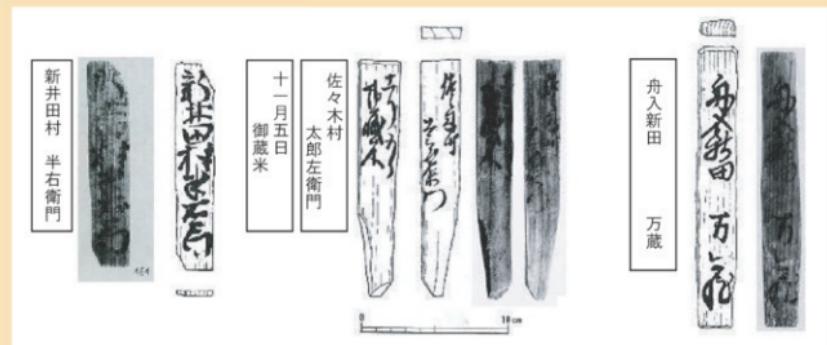
土人形（天神・だるま・飼乗り童子・馬乗り大黒）



水あめのふたと重臣・堀家の名札

### にらだちっかん <荷札木簡>

江戸時代後期の天保年間に描かれた城絵図を見ると、二ノ丸北側の一角に「御上米藏屋敷」と記された場所があります。これまでの発掘調査の結果、同所付近からは文字の書かれた木札が数多く出土しました。木札には、地名・人名・日付などが記され、中には「御藏米」の記載もありました。これらの状況から、木札は城に納められた米俵などに付けられたものと考えられます。新発田藩の米蔵は、信濃川と当時の阿賀野川の河口部にある沼垂（現在の新潟市中央区）にあったことを考えると、新発田城の「御上米藏屋敷」は、城内で消費される米を備蓄した場所だった可能性があります。なお、荷札に記された地名は、新発田城近隣の村々が多く、近郷から城に直接納入されたのかも知れません。



「御上米藏屋敷」地の付近から出土した荷札木簡

# 新発田城についての年表

藩主	元号	西暦	新発田城のことから	新発田藩のできごと	日本史のできごと
①秀勝	慶長3	1598	満口秀勝、新発田に入封する。 五十公野に居を構える。	加賀の大寺寺から6万石で入封	
	〃4	1599	新発田の地で、築城の縛りを始める。	上杉謙民一揆(1600年)	関ヶ原の合戦(1600年) 江戸幕府の開府(1603年)
	〃7	1602	築城を開始する。 『名坂善蔵始ル吉寺山ヨリ名ヲ切出ス』		
	〃8	1603	西ノ門が完成する。		
②宣勝	〃18	1613	大手門の普請を開始する。	沢海藩(1万2千石)を分家(1610年)	大坂冬の陣(1614年) 大坂夏の陣(1615年)
③直直方	正保3	1646	御風呂、御居間の次の間が完成する。	切梅家・池之端家・ニッ堂家を分家(1628年)	島原の乱(1637年) 鍋国の完成(1641年)
	〃4	1647	本丸の辰巳櫓が完成する。	家中法度の発布(1630年)	
	慶安3	1650	二ノ丸の唐紙貼りが完了する。		
	承応3	1654	寄附書院が完成する。 【新発田城の完成】		
	寛文4	1664	二ノ丸の御風呂から火出する。	下屋敷「清水谷御殿」の完成(1658年) 塙留め事件(1660年)	
	〃8	1668	三ノ丸の家中屋敷から出火、大火災発生。 新発田城がほぼ全焼する。 『御本丸不焼…ニノ丸不焼…御作事小屋不焼』	領内法度の発布(1668年)	
	〃9	1669	大地震により、本丸の石垣が崩壊する。		
	〃10	1670	本丸の辰巳櫓石垣から復旧工事を開始。 (石垣を亂積みから切込接ぎに変更か)	「五十公野御茶屋」が完成(1676年)	
	延宝2	1674	本丸の寄附書院の再建を開始する。	家中法度の整備(1676年)	
	〃7	1679	本丸の三階櫓が完成する。		
④重雄	貞享2	1685	二ノ丸御殿の棟上げを行う。		
	〃3~4	1686~1687	裏門とその橋が完成する。	沢海藩が改易(1687年)	生類憲みの令(1687年)
	元禄1	1688	本丸普請の棟上げを行う。 二ノ丸の会所長屋が完成する。		
	〃2	1689	西ノ門協櫓が完成する。		
⑤重元	〃13	1700	二ノ丸の舞台が完成する。 【寛文4年大火災の復旧工事が完了】		赤穂義士の討ち入り(1702年)
	享保4	1719	二ノ丸・三ノ丸の櫓・門が一部焼失。		
⑥直治	〃10	1725	大雨で本丸の石垣が一部崩壊する。	紫雲寺(塙津)潟の干拓(1728~35年)	享保の改革(1716~45年)
	〃12	1727	大手門の再建を開始する。	逸見家を分家創設(1730年)	
	〃17	1732	表門を再建か。	松ヶ崎掘削工事(1730年)	享保の大飢饉(1732年)
⑦直温	寛保2	1742	大手門西脇櫓が完成する。 西ノ門の再建を開始する。		
	〃3	1743	大手門/西脇櫓が完成する。		
	延享1	1744	西ノ門協櫓が完成する。		
	〃2	1745	二ノ丸の櫓が完成する。		
	宝曆2	1751	表門を修理する。		
⑧直義	天明3	1783	表門を修理する。	講堂の設立(1772年) 医学館の設立(1776年)	天明の大飢饉(1782~87年)
	寛政1	1789	大雨により露塩や土塁が崩れる。		
⑨直侯	〃7	1795	表門を修理する。	清涼院様一件(1789年) 2万石高替え(1797年)	寛政の改革(1787~93年)
	〃12	1800	本丸の石垣が一部崩壊する。	講堂を「道学堂」に改称(1797年)	
	享和1	1801	石垣の復旧工事が完了する。		
⑩直謙	天保4	1833	本丸石垣のはらみ出し部分を積みなおす。		
	〃8	1837	表門を修理する。	福島潟干拓(1823~35年) 陸奥国領地と蒲原郡内の1万石余を村替え(1829年)	天保の大飢饉(1833~39年) 大塙平八郎の乱(1837年) 天保の改革(1841~43年)
⑪直溥	嘉永2	1849	本丸の三階櫓の修理が完了する。		
	〃3	1850	大雨により本丸の石垣が崩壊する。		ペリーが浦賀に来航(1853年)
	万延1	1860	本丸の辰巳櫓を修理する。	10万石に高直し(1860年)	日米和親条約(1854年)
⑫直正	文久2	1862	本丸石垣のはらみ出し部分を積みなおす。		桜門外の変(1860年)
	慶応3	1867	表門を修理する。		
明治5	明治5	1872	魔城となり、表門・石垣・二ノ丸隅櫓を残し、城内の建物は取り壊し。	新発田藩を廃し、新発田県を設置する(1871年)	大政奉還(1867年) 廢藩置県(1871年)